

（西暦） 2023 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

ICU 看護師の抱える倫理的課題 - その認識と倫理的実践を阻害する要因 -

学位の種類： 修士（看護学）

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 21894706

氏 名：古川 文子

（指導教員名：習田 明裕）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする。

研究背景

日々医学は発展し、集中治療室（Intensive Care Unit:以下 ICU）でも様々な治療を駆使して患者の救命に貢献してきている。しかし、複雑な病態にある患者や高齢者なども多く、高度先進医療を駆使しても回復が見込めない場面にも遭遇することも稀ではない。こうした経験をもとに、これまで以上に患者や家族の生き方について医療や看護を考え、多様な価値を尊重した看護を行い、意思決定をしていかなければならない。

これまでの倫理的課題に関する研究では、手術室看護では倫理的感受性において横断的研究や、患者の安全を見出すことが中心の手術室看護の道徳的感性と自立（西田・中村，2002）、精神科看護においては身体拘束や意思決定に関連して倫理的課題、高齢者看護では自律の尊重に関する課題、救急医療では終末期ケアや患者家族看護への葛藤（西開地，2018）、脳死問題や臓器移植（志自岐，2007/習田，2011）について研究され、それぞれの倫理的課題が明らかとなっている。しかし ICU では、倫理的課題に対し明らかにしたものはまだ少なく、救急医療のように ICU においても生命の危機に瀕した重症患者の治療を使命とすることから、命が最優先となる中で様々な倫理的課題は存在する。中には、救命や安全を優先するがために、非人道的な行為に至ってしまう組織体制上やむを得ず起きていることもある。しかし、多忙な中で治療が優先され、患者そのものへ目を向ける余裕がなくなる状況に ICU 看護師は葛藤や納得できない思いを感じ、その状況が、実際の医療現場において繰り返されることで、本来行すべき看護ケアを軽視してしまいかねない。ICU 看護師には、こうした倫理的課題が存在し、人権の尊重が疎かになることが看護師を疲弊させ、ストレスやバーンアウトに結びついている（相川，2014）。そこには、環境や組織が影響し、正しいと思うことができない管理上の倫理的課題も内包していることが考えられ、ICU における倫理的課題を改めて明らかにすることの意義があると考えられる。

研究目的

本研究は、ICU 看護師の抱える倫理的課題に内在する倫理的葛藤と苦悩を明らかにすることであった。その認識を明らかにし、ICU 看護師の実践を阻害する因子について、語りの中から明らかにし今後の看護学における視座を得ることである。

研究方法

ICU 臨床経験 5 年目以上の看護師 6 名を対象に半構造化インタビューを用いてデータ収集した。

研究結果

インタビューの協力が得られた研究協力者は6名で、そのうち男性が1名、女性が5名であった。看護師経験年数は7年から13年であり、平均看護師経験年数は 10.5 ± 2.06 年であった。ICU看護師経験年数は5年から10年であり、平均看護師経験年数は 7.2 ± 1.95 年であった。対象者の所属ICUは、術後患者と二次救急で搬送される患者を対象とする施設であった。職位は全てスタッフナースで、インタビューは1人1回ずつ実施、インタビュー時間は平均62分68秒であった。

インタビューの分析結果として、倫理的課題の葛藤にあたるカテゴリーには、【何よりも治療へのリスク軽減が最優先される】【手や思考だけで動くケアにより、相手に向き合い寄り添うことができない】【適切な意思決定プロセスを十分に踏めない】【救命が第一優先により失われるもの】の4つが抽出された。

倫理的苦悩では、【患者を思い考える看護よりも組織管理の維持が優先される】【命が優先されることにより人間的存在として扱う行為が薄れ専心義務が果たせなくなる】【語り合えない組織風土が患者を思う看護師のケアに影響する】【ICU組織として維持していくために求められるもの】の4つカテゴリーが抽出された。

考察・結論

ICU看護師が抱える倫理的課題には、葛藤として【何よりも治療へのリスク軽減が最優先される】、【手や思考だけで動くケアにより、相手に向き合い寄り添うことができない】、【適切な意思決定プロセスを十分に踏めない】は命が優先させる形式的な行為中心による人間的存在の希薄化と、その中で救命を第一に考えた組織とするための考えや価値判断の不一致として【救命が第一優先により失われるもの】のカテゴリーであった。重症患者の治療や救命を重要視するが故に、患者一人一人に人間的存在として行為を向かわせることが希薄化し、療養の世話よりも診療の補助が優先となる、役割認識や価値観の近いによる看護行為への葛藤が起きていると考えられた。そのため、多様化し複雑化する社会において、看護師は日頃より人々への関心を持ち倫理的な思考を育成していくことが課題である。

倫理的苦悩では、【患者を思い考える看護よりも組織管理の維持が優先される】、【命が優先されることにより人間的存在として扱う行為が薄れ専心義務が果たせなくなる】、【語り合えない組織風土が患者を思う看護師のケアに影響する】、【ICU組織として維持していくために求められるもの】が抽出され、これは患者にとっての最善の医療や看護を提供したい看護師にとって、組織の意向や制度を背景に違和感や不全感を抱き、看護師自身では解決策が見いだせない倫理的苦悩を抱えていることがわかる。

これからの時代、「医療・看護の質」がより問われ、それをもって対象者は病院を選定する。そのため、看護そのものを倫理として正しく捉え、実践へ結び付けていけるような教育の場を設計し、人材育成を行うことが重要である。また、社会や組織として患者の最善をいかに捉え、制度などの仕組みに取り入れていけるのか、臨床に沿った管理方法へのアプローチが重要であることが示唆される。